

## 第3回 豊前国府まつり

日時：6月8日(日) 10時00分～15時00分

会場：豊前国府跡公園 芝生広場(みやこ町国作)

### \*\*\* 主なイベント \*\*\*

★子どもイベント広場  
(ペットボトルロケット・バルーンアートづくり、ふあふあ体験 [要実費])

★野外ステージイベント(文化協会)

★ミニ学習コーナー ★出店 など

■ お問い合わせ先：豊前国府まつり実行委員会 (生涯学習課文化係 [歴史民俗博物館] 電話：33-4666) ■

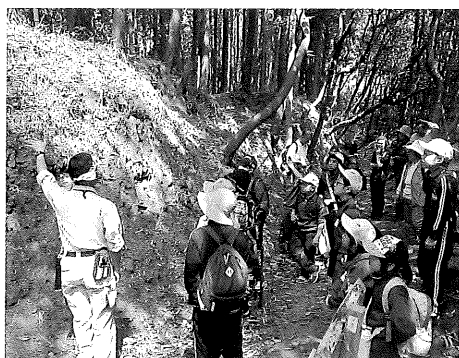
### 5月の業務日誌から

5月3日(土)、「京都東山文化スタ  
ディ講座・夏の講座」として当館学芸員  
による「無双真古流の記憶と記録」と  
題した講演会が行われ、町ゆかりの華  
道に関する調査成果が紹介されました

5月8日(木)、伊良原小中学校合同の  
学習遠足が行われ、官兵衛ブームに沸  
く馬ヶ岳城跡を当館学芸員と歩きまし  
た。土の要塞としての形を留める馬ヶ岳  
の意外な姿にみんな感心しきりでした

5月15日(木)、諫山小学校5・6年生  
の皆さんが来館され、モノづくり体験  
学習にチャレンジしました。作ったのは  
古代のジュエリー「勾玉」で、古代人の  
辛抱強さを学んだ一日でした

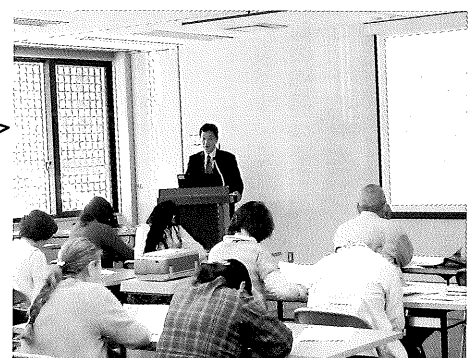
5月18日(日)、開館20周年記念事業  
の一つ「生立八幡宮僧形八幡神像展」  
が終了しました。普段は見ることのでき  
ない身近な神様の意外なお姿に来館者  
の関心が寄せられていました



▲馬ヶ岳城の切岸(防壁)を見学する児童たち



▲鷹窟権現などの仏像風神様も展示されました



▲無双真古流に関する初の研究報告となった講座



▲勾玉作りは丁寧さと辛抱が必要!?

みやこの歴史発見伝75

# 失われた梵鐘の記録

再録版

## 大砲になった梵鐘

幕末の文久三年（一八六三）、小倉藩は外国船襲来に備えて関門海峡沿岸に砲台（台場）を築き、大砲を据え付けました。とりわけ、小倉城下の紫川河口に造られた二つの台場（東浦浜台場・西浦浜台場）は、総延長が約一八〇m以上に及ぶ大規模なもので、そこに据え付ける大砲は既存のものでは不足でした。そこで藩は、領内の寺院・神社から梵鐘を徴発し、城下近くの企救郡篠崎村（現小倉北区）に設けた鋳造所で大砲に鋳替えたのです。梵鐘を毀して大砲に鋳替えることを四字熟語風に「毀鐘鑄砲」と言います。毀鐘鑄砲と言え、昭和十六年（一九四一）に施行された金属回収令を一番に思い浮かべますが、旧小倉藩域では、既に幕末期に殆どの梵鐘が一度失われ

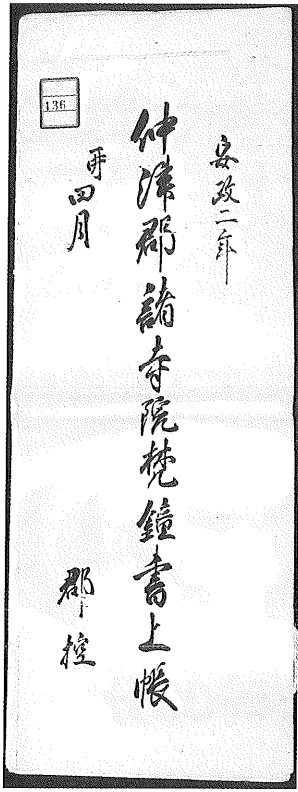
てしまいました。金属回収令により徴発されたのは、大半が明治以降、新規に購入・鋳造されたものだったようです。

## 仲津郡諸寺院梵鐘書上帳

文久の毀鐘鑄砲、昭和の金属回収令という「ダブルパンチ」により、幕末期以前のこの地域に、どのような梵鐘が、どのくらいの数あったのか、といった点について、現存するものからは当然調べることができません。

ただ、幸いなことに、旧仲津郡（現みやこ町犀川・豊津と行橋市の一部）については安政二年（一八五五）に行われた寺院梵鐘の所在調査史料「仲津郡諸寺院梵鐘書上帳」（九州大学附属図書館付設記録資料館所蔵「永井文書」）。以下「安政二年書上帳」と仮称）が現存しているの、文久の毀鐘鑄砲

（現みやこ町犀川・豊津と行橋市の一部）については安政二年（一八五五）に行われた寺院梵鐘の所在調査史料「仲津郡諸寺院梵鐘書上帳」（九州大学附属図書館付設記録資料館所蔵「永井文書」）。以下「安政二年書上帳」と仮称）が現存しているの、文久の毀鐘鑄砲



永井文書「安政二年 仲津郡諸寺院梵鐘書上帳」

永井文書は仲津郡長井手水（現みやこ町犀川の二部）の大庄屋文書（九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史料部門蔵）

## 安政2年(1855)仲津郡所在の梵鐘鑄物師と鋳造年

居住地	鑄物師	鋳造年
小倉	河野吉三郎尉(森□)	1717
	河野次(治)郎右衛門(藤原森重)	1714 1724 1716
	河野吉兵衛(藤原森次)	1775 1783
	吉村真次	1697
	吉村伊右衛門(寧次)	1724
	吉村弥兵衛(正次)	不明
	吉村弥兵衛(吉次)	1792
(椎田?)	安部治右衛門尉	1689
	石火矢屋吉十郎(貞俊)	1706
中津	孫兵衛(藤原時次)	1822
豊後高田	寿渡扇	1838
	安部弥助(秀信)	1833
	植木来吉(藤原光重)	1829
	植木藤吉(藤原秀延)	1725
	(鑄屋)寿右衛門	1840 1838

【史料】「安政二年仲津郡諸寺院梵鐘書上帳」(永井文書136)

以前の様子を知らることができません。安政二年、幕府は全国の諸藩に対し毀鐘鑄砲を命じましたが（ただし、形式的には朝廷が命じた形をとる）、小倉藩ではそれを受けて領内寺院の梵鐘調査を実施し、郡ごとにまとめさせました。安政二年書上帳はその仲津郡分です。ただ、結局この幕府毀鐘鑄砲令は、同年十月に江戸でおきた安政大地震の影響で実行されずに終わってしまっています。小倉藩でもこの時鑄潰された鐘はありませんでした。

## 安政二年仲津郡内の梵鐘

安政二年書上帳によると、当時仲津郡には四十七ヶ寺に五十四口の梵鐘が存在しました。郡内には大小一〇〇程度の寺院があり、その中で、およそ半数が梵鐘を所持していたことになり、この表には書いていたことになりません。また、安政二年書上帳には梵鐘の銘文も書き上げられていて、鐘によって作成年や作者（鑄物師）の名を刻んだものもありました。それによると、当時、仲津郡内の寺院梵鐘で、作成年が刻まれたものは三十一口あり、それらは全て江戸時代の作でした（十七世紀三口・十八世紀十三口・十九世紀十五口）。また、鑄物師の名が刻まれたものは十九口ありましたが、その鑄物師ごとに作成年をまとめたのが右の表です。これを見ると小倉鑄物師の作品は不明の一口を除いて十七・十八世紀に限られ、豊後高田（現大分県豊後高田市）のものは十八世紀の一口を除いて十九世紀の作です。また、この表には書いて

ていませんが、豊後高田の鐘を持つのは、山間の小堂・小寺院に限られています。なぜこういう分布なのか、詳細は今のところ不明です。安政二年書上帳にある鐘で最も古いのは、今井村（現行橋市）浄喜寺の大鐘です。この鐘は、江戸時代初期に当地方を治めた細川忠興が、慶長七年（一六〇二）に寄進したものでした。とても出来の良い梵鐘だったようですが、この鐘は現存していません。おそらく文久の毀鐘鑄砲で鋳潰されたのでしょう。現在、浄喜寺には応永二十八年（一四二一）今井鑄物師・藤原安氏作の大鐘（福岡県指定文化財）があります。これは元々英彦山にあった鐘ですが、明治初年の神仏分離・廃仏毀釈の流れの中で売却されました。それを明治五年（一八七二）に小倉出身で当時豊津在住の中原嘉左右という豪商が購入しています（『中原嘉左右日記』）。おそらく、それから間もない時期に、中原嘉左右が浄喜寺へ寄進したものでしょう。

## 願

今まで調べた範囲で、安政二年書上帳にある梵鐘五十四口の現存は確認できていません。調査が進むにつれて発見されるものもあるかもしれませんが、殆どは文久の毀鐘鑄砲で失われたことでしょう。あと二ヶ月余りで六十九回目の終戦記念日。二度と鐘が鋳潰されるような時代がこないことを心から願いたいものです。

(川本英紀)